

動詞「別れる」と格助詞

山西正子

キーワード 「別れる」「と」「に」「相互的」「一方的」

要旨 本稿は、明治以降における動詞「別れる」と共起する格助詞について考察し、以下の5点を指摘する。

- ① 現代語では「～と別れる」が優勢であるが、「死別」に関しては、辞書で「～に別れる」が記載されることもあり、認知度は高いといえる。
- ② 「死別」に関して「～に別れる」が認知されるのは、格助詞「に」の性格に由来するからであろう。すなわち「に」は「と」に比して固定的・一方的な性格が感じられ、「死の世界に止まってもはや動かない相手」が「に」で表現されやすいと考えたい。
- ③ 古典語の「名残り」ともいべきか、空間的な別れをいう「～に別れる」も命脈を保っている。20世紀前半までの文学作品はもとより、以後の作品でも、時代小説であれば使用されることがある。
- ④ 格助詞「と」の相互性によって、生きている人間同士の「今後の変動があり得る／対等の別れ」を「と」が分担するのではないか。
- ⑤ 格助詞「に」は、固定的・一方的な状況と結びつきやすい性格がある。「～に別れる」は、その性格と、古典語からの伝統とで、現代語の中でも命脈を保ちつづけている。

内容 0 問題提起

1 前提事項

11 先行文献の記述

12 国語辞書の記述

13 「に」との共起

14 古典語の場合

2 明治以降の「別れる」と格助詞

21 『和英語林集成』の場合

22 明治以降の文学作品の例

3 関連事項

31 「離れる」と格助詞

32 「はぐれる」と格助詞

4 まとめ

41 事実の確認

42 「に」の性格

0 問題提起

川端康成『伊豆の踊子』(1927)について、川端の『一草一花』(初出は1967、ここでは講談社文芸文庫1994による)は次のことを記す。すなわち、最終部分の

はしけはひどく揺れた。踊子はやはり唇をきつと閉ぢたま一方を見つめてゐた。私が縄梯子に捉まらうとして振り返った時、さよならを言はうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなづいて見せた。

について、この「うなづいた」のはだれかという質問を、しばしば受けるというのである。

しかし、その後続く、

「いいえ、今人に別れて来たんです。」

の部分の、格助詞「に」と動詞「別れる」との共起については、1967年の時点では、これに違和感を持ち、川端本人に質問をする人はなかったか、僅かであったか。いずれにせよ、川端はこのことについては、言及していない。

稿者にとっては、「人と別れる」が自然で、「人に別れる」は多少の違和感がある。この問題は稿者のみの無意味なこだわりか否かを検証したい。

1 前提事項

11 先行文献の記述

動詞と格助詞との共起については、多くの問題が——したがって考察も——ある。ここでは、「別れる」と格助詞に関する記述の有無などを確認し、要点などを示す。結果としては、以下の文献は、「相談する／会う」については言及しても、「会う」の対義語ともなり得る「別れる」を例示することはない。

その1：久野 暉(1973)「ト会ウ」と「ニ会ウ」『日本文法研究』大修館書店

動作の相手を示すために「と／に」のいずれを選択するかに関しては、ルールがある。

「太郎は花子 と／に 恋をする」が同意義ではないように、「太郎が花子 と／に会った」も同意義ではない。すなわち、「と」が相互的、「に」が一方的という差異がある。

その2：益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』

「会う／相談する／衝突する」等の「対称性」の動詞の一部は、相手を(「と」のほか)「に」でも示せる。(ただし、「別れる」は例示されない。また、動作の起点を表す「を／から」の差異について、無意志的動作の場合は「を」は使わないことを示す(31で再度述べる))。

その3：白川博之(2003)「助詞」『岩波日本語使い方考え方辞典』

助詞の使い分けに問題がある例を取り上げ、「が／は」のほか、格助詞の問題例の一つとして「先生 と／に 相談する」を示す。ただし、「別れる」は例示されない。

12 国語辞書の記述

さらに通行の辞書の記述でも、「別れる」と格助詞について積極的に言及するものは少ない。例えば、『明鏡国語辞典初版』（2002）は、「会う」については、「～とあう」と「～にあう」の使い分け——上記久野（1973）に添うものである——にまで言及するが、「別れる」については語義と例文を示すのみである。その一部を示す。

- ① それまで一緒にいたものが離れて別々になる。「駅で友人とー」
- ② 夫婦・恋人などがそれまでの関係を解消する。「夫〔彼女〕とー・れて二年になる」
- ③ 死に別れる。死別する。「幼くして母〔父〕とー」

「別れる」と共起する格助詞としては「と」が示されるのみである。

同書は、「はぐれる」——「別れる」より使用頻度は低いであろう——については、前述の「会う」の場合と同様、共起する格助詞として「に／と／を／から」を示し、その差異を説明するのだが、「別れる」については「と」しか示さないのである。

13 「に」との共起

ただし一部に、無視できない記述があるので、その要点のみを記す。

その1：『旺文社国語辞典第九版』（2002）の記述

- ① 別離する。「妻とー」
- ② 死別する。「幼い時母にー」

（ただし、「使い分け」を示す欄には、「友達と駅で別れる」「生後まもなく両親と別れる」あり）

その2：『新明解国語辞典第六版』（2005）

わかれる 【別れる】〈だれト／だれニ〉「親にー〔＝△死別（生別）する〕／妻とー〔＝△別居（離婚）する〕」

この2書によれば、「死別（生別）する」意味では、「に」と共起し得ることになる。そこで、この「死別」の意味に着目し、「死に別れる」の項目をみると、上記『明鏡国語辞典』および『岩波国語辞典第6版』（2000）が、例文として「親にー」を示す（いずれも「死別」には例文なし）。

ただし、『広辞苑四版』（1991）の例文は「親に死に別れる」と「夫と死別する」であり、『大辞泉増補版』（1998）では「親と死に別れる」と「幼いころに父に死別した」である（下線稿者）。

これらの記述から、現代語でも、「死別」に関しては、「と」と同時に「に」も使用されると考えてよいのであろう。

しかしながら、はたして、「死別」ではない、親しい関係の解消をいう「恋人と別れる」意の、「～に別れる」や、空間のレベルでの「駅で友人と別れる」のような、「～に別れる」はあるのだろうか。あるとすれば「～と別れる」との相違点はどこにあるのだろうか。

動詞「別る」を含む古歌としては、たとえば

- (1) むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな (古今集・卷八離別 紀貫之)
 (2) かけてこそ思はざりしかこの世にてしばしも君に別るべしとは (更級日記)

などがある。(1)は山の石井のもとでの、去っていく人との別れに際しての歌、(2)は25歳の作者を京に残し、常陸国に赴任する60歳の父を見送る際の歌である。いずれも「死別」ではない。したがって「～に別る」は理解の範囲内ではあるが、あくまでも古典語であり、現代語「～に別れる」への違和感は払拭できない。

14 古典語の場合

古典語「別る」に関する記述を3点、要約して示す。

その1：『時代別国語大辞典上代編』(1967三省堂)の「わかる〔別〕」の項目

対象は助詞「を」で示すことが多く、「と」の例はない。

その2：新日本古典文学大系『古今和歌集』(小島憲之・新井栄蔵校注)卷八離別 374脚注

「人と別れる」ことをいう場合、詞書では「に」ではなく「を」をとる。

その3：新日本古典文学体系『後拾遺和歌集』(卷第十まで平田喜信校注)卷第八別 464脚注

都いづる今朝許だにはつかにもあひみて人を別れましかば(僧基法師)は、底本(宮内庁書陵部蔵本)は第四句「人を」だが、「僧基法師集」(詳細説明なし)の本文は「人に」である。

これらの記述から、問題視すべきは「に」と「を」であることが知られる(これについては別稿にゆずる)。

さらに、後の時代についても、『時代別国語大辞典室町時代編』(2001三省堂)に記載されるのは、
 京城ニテ人ニワカレタ詩ナルホドニ(中華若木詩抄)

父ごぜに別し事も太鼓故、さあらば親の敵ぞかし(光悦本謡=富士太鼓)

である。ここでは「に」と共起する例のみが示される。

また『日葡辞書』(1603)の例は、『邦訳日葡辞書』によれば「親、妻、子、などに別れる」である(上記『時代別国語大辞典室町時代編』にも収載されている)。

この時代まで、「人と別れる」場合、死別でも空間的別離でも、「に」と共起したことが確認できる。

格助詞「と」は上代からある。そして、現代語では現在通行の辞書の例文にもあるように、「～と別れる」が一般的である。もはや弱小勢力といわざるを得ない「～に別れる」について、概観していく。

2 明治以降の「別れる」と格助詞

21 『和英語林集成』の場合

初版(1867)から「WAKARE -ru, -ta」のかたちで記載される。例文は再版(1872)、三

版（1886）まで同一で、カナで示せば「ツマ ガ オット ニ ワカレル」である。

この場合、「妻」と「夫」の組み合わせであり、「死別／離別」が意識されているのであろう。

また、同じく初版から三版まで、「オヤ ニ ハナレタ」があり、「to be left by one's parents」とされる。この「～に離れる」——現代語ではいささかの違和感がある——については31でふれる。

さらに言えば、1886年成立の『言海』に繋がる『大言海』新訂版（1956、ここでは第十三刷2001による）の「わかる」の項目は、「親ニ別る、夫ニ別る、同行ノ人ニ紛レハナル」としており、「～と別れる」の記述はない。

「～に別れる」の勢力のほどが窺われる。

22 明治以降の文学作品の例

220 検討の必要性

明治以降の言語変化についての記述は極めて多い。学術論文は無論のこと、辞書でも言及されることがある。例えば、いわゆる副助詞「きり」については、岩崎摂子（1972）が、明治時代には「ぎり」が優勢で、現代では「きり」が多いことを示し、『明鏡国語辞典初版』（2002）は、「古風な言い方で「ぎり」とも」と注記をする。また、自動詞「分かる」については、この『明鏡国語辞典初版』が、「俗に他動詞としても使う」とするが、山西・駒走（2004）は「分かる」の他動詞用法は「もはや俗語ではない」との立場を示す。

しかし、「別れる」と格助詞との共起関係に生じた変化については、関心が払われていないようである。現代語では「弱小勢力」といえるであろう——辞書の例文にも発見できない——「死別」以外の「別れる」と「に」の共起は、文学作品では、比較的最近まで、例外的なものではなかったことを確認したい。

とはいえ、20世紀後半からは、用例の確認はさほど容易ではなく、「～に別れる」の弱体化は否定できないことも、また認めたい。

用例調査は、主として「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」により、文字列「別れ」によって検索した。「別れ」のないものについては「わかれ」も調査した。これ以外の用例については注記した。

221 「死別」の意の「～に別れる／死に別れる」

13で言及したように、「死／生別」の場合は、現代語でも「～に別れる」の認知度は高いと考えられるので、それを確認しておく。

明治初期の三遊亭円朝『真景累が淵』（岩波文庫による、底本の本文確定年次不明、ただし1888までには確定か）に3例の「～に別れる」を確認できる。

(3) 宗悦は五十の坂を越してから女房に別れ、娘が二人有って、…略…

(4) 「力に思ふ方に別れて、実に今度ばかりは力が落ちました。」

(5) 「どうも富五郎は両親に別れたやうな心持が致しますなア。」

(4)のほか、(3)(5)も「死別」といえるだろう。

このあとも、用例は多い。「～に死に別れる」の例も合せて示す。ただし(7)(9)は生別の可能性もある。

(6) 「兄貴に別れたのは、つい未だ昨日のようになしか思われねえがなあ」

(1906『破戒』島崎藤村)

(7) 子が無くて夫に別れてから、裁縫をして一人で暮らしている女なので…略…

(1911『カズイステカ』森 鷗外)

(8) 誰でも親に死に別れると一時は失望するものだけれど…略…

(1939『痴人の愛』谷崎潤一郎)

(9) 春さんは十年ほど前に細君に別れて、清香という古風な名前を持っている一番下の妹と一緒に生活していた。

(1954『あすなる物語』井上 靖)

(10) 小弁に死に別れて生きている甲斐のない躰なのだから…略…

(1966『華岡清州の妻』有吉佐和子)

(11) 帝がおん父の桐壺院に別れられたのはまだいわけないおん年五歳のころだったから…略…

(1979『新源氏物語』田辺聖子)

(12) 両親に死に別れて緒方夫妻の養子となるべく東舞鶴の駅に降りたったことが…略…

(1982『錦繡』宮本 輝)

222 関係解消の「別れ」の場合

12に示した『明鏡国語辞典初版』(2002)の、「②夫婦・恋人などがそれまでの関係を解消する」の例文が「夫〔彼女〕と一・れて二年になる」であるように、現代語としては「と」が自然である。

しかし、「～に別れる」も文学作品には——むろん「と」が多いのだが——散見される。ここでは、「夫婦・恋人」のほか、法的に親子の縁が切れること、遠く離れ住むことで友情や親兄弟の情が途絶えるなど、それまでの安定的な人間関係に変化が生じる状況も含めて考える。

(13)は離婚により母子の縁が失われること、(14)は主従の関係が絶たれること、(15)は海の世界に行くことになり空の世界から離れること、(16)は親友の外国遊学により親交が失われること、(18)は太宰府から帰任途中の父に同行している女性が、(須磨の光源氏のもとに止まるために)家族と離別することをいう。

(13) 太郎に別れて顔も見られぬ様になればこの世に居たとて甲斐もないものを…略…

(1895『十三夜』樋口一葉)

(14) 「敵の面体を見識らぬ我々は、お前に別れては困るに違いないが…略…」

(1913『護持院原の敵討』森 鷗外)

(15) 「ポウセさん。…略…ここから空のみなさんにおわかれしましょう」

- (16) 又実際、今大宮にわかれるのは淋しくもあった。 (1920『友情』武者小路実篤)
- (17) その二月にお清には別れた事になっていた。それ以来彼は郁子を欺き続けて来たのだ。
(1926『晩秋』志賀直哉)
- (18) 五節の君は、親兄弟に別れてでも、この浦にとどまりたい、と思った。
(1979『新源氏物語』田辺聖子)

223 空間的な「別れ」の場合

- 222 と異なり、人間関係の変化が生じない、あくまでも空間的な「別れ」を言う場合、現代語では「～と別れる」が通例である。しかし、明治以降も「～に別れる」は多数、確認できる。
- (19) 此处で百姓に別れてその川の石の上を行こうとしたが…略… (1900『高野聖』泉鏡花)
- (20) それから皆に別れて心細くも英国へ着したが、朋友もおらず方角も分らず…略…
(1901夏目漱石書簡・『漱石書簡集』岩波文庫)
- (21) 杖柱とも思う同伴の若いものに別れると六十の迷児に成って…略…
(1910『歌行燈』泉鏡花)
- (22) 前日には大石に袖浦館の前で別れて、上野へ行って文部省の展覧会を見て帰った。
(1911『青年』森鷗外・新潮文庫)
- (23) Aは小僧に別れると追いかけられるような気持ちで電車通に出ると…略…
(1920『小僧の神様』志賀直哉)
- (24) 行一は毛糸の首巻に顎を埋めて大槻に別れた。 (1926『雪後』梶井基次郎)
- (25) 根津の町でその職人さんに別れると、又私は飄々と歌を唱いながら路を急いだ。
(1930『放浪記』林芙美子)
- (26) 改札口で彼等に別れて…略…電車を待つ間、私とナオミとはあんまり口を利きませんでした。
(1939『痴人の愛』谷崎潤一郎)
- (27) 先生に別れるは国の停車場でわかれたっきりだ。 (1941『路傍の石』山本有三)
- (28) 李陵は旧友に別れて、悄然と南へ去った。 (1943『李陵』中島敦)
- (29) 鮎太は用事を思い出したと言って、信子に別れて…略…市電に乗った。
(1954『あすなろ物語』井上靖)
- (30) 向こうから駆けて来る与田さんという人に遭った。…略…「いや、御免なすって」と与田さんに別れて行こうとした。しかしそれは無理であった。 (1966『黒い雨』井伏鱒二)
- (31) 両親の入道夫妻も…略…いざとなると、娘にも別れに別れて暮さねばならない。
(1979『新源氏物語』田辺聖子)

このように、古典語の延長にある「人に別れる」は、命脈を保ち続けていたのである。ことばの根強さを思わされる例ではないだろうか。

森鷗外には、上記(7)(22)のほかCD-ROM版『山椒太夫・高瀬舟』の検索では『山椒太夫』

(1915)の「お嬢様、若様に別れて、生きてどこへ往かれますよう」や「律師は権現堂に休んで、厨子王に別れた」の2例がある。そしてここには「～と別れる」はない。

しかし、さすがに、20世紀後半の作品では「人と別れる」が席卷するようになる。

例えば、三浦綾子『塩狩峠』(1968)は「父に死に別れる」1例のほかは「～と別れる」8例、沢木耕太郎『一瞬の夏』(1981)も12例すべてが「～と別れる」である。また(12)に示した『錦織』は、この「～に死に別れる」のほかは19例すべてが「～と別れる」である。

さらには、青井夏海『赤ちゃんをさがせ』(2003・創元推理文庫)では「死に別れる」2例、夫婦・恋愛関係の解消の「別れる」7例の計9例すべてが「と」と共起し、「に」はない。

その中で、時代小説においては、まだ、「～に別れる」は命脈を保っているかの感がある。

(32) 藤吉郎に別れたあと、光秀は自分の隊と小荷駄をまとめて敦賀を出発した。

(1966『国盗り物語』司馬遼太郎)

(※ほかに「御亭主殿と別れて暮らす」1例)

(33) 逸平に別れて歩き出しながら、文四郎はいまの気分には酒を飲むことが一番ぴったりしていることに気づいた。

(1987『蟬しぐれ』文春文庫・藤沢周平)

(※ほかに「村の四辻で三人と別れた」など、「～と別れる」4例)

あるいはこの分野で、また上記(31)のような古典の現代語訳の場合などで、古典世界の影響下、「～に別れる」は、余韻を響かせつつ命脈を保ち続けるのもあろうか、と考えられる。

3 関連事項

「別れる」に類似する「離れる」や「はぐれる」についても触れておく。いずれも、対象となる「人」(あるいは「所/組織」など)との間に距離を生ずることである。2語とも、「に」との共起関係が、現代語では希薄であったり、辞書の見解に相違するなど、端的に言えば「弱化」している可能性を示唆する例といえるだろう。

31 「離れる」と格助詞

12、13に示した国語辞典3種のいずれもが、「離れる」と共起する格助詞として、「から」と「を」を示す。11で示した益岡・田窪(1992)も動作の起点として「から/を」を挙げるが、これらのいずれもが、「に」に言及しない。

しかし、かつては「に」とも共起した。『日本国語大辞典第二版』(2000)は『源氏物語』の「女親にはなれぬは」(濤標)や、『きのふはけふの物語』の「ある女房、若き男にはなれ」などを挙げている(下線稿者)。

明治以降の例としては、この『日本国語大辞典第二版』が「尋常小学読本」(1887)の「弟妹にはなれて」を示すが、その50年後にも用例がある。

(34) (かつての職人はすべての品を)腕によりをかけて一生のほまれと言ったように力んで作りました。今は数で作るようですが、昔は手間や何かにはなれてのことでした。

(1937『名ごりの夢』・今泉みね(1855年生まれ)口述筆記・平凡社東洋文庫)

32 「はぐれる」と格助詞

「はぐれる」は「別れる」「離れる」に比して、使用頻度が高いものではない。そのためか、13で示した『旺文社国語辞典第九版』、『新明解国語辞典第六版』、『岩波国語辞典第6版』のいずれもが、「に」との共起しか記述しない。しかし『明鏡国語辞典初版』は、「に」のほか「と」「を」「から」まで例示する。その説明によれば、「に」は動作の基点となる相手、「と」は動作の及ぶ対等の相手、とされる。すなわち12で見た「会う」の項で示す、久野(1973)の視点と同一である。

しかし次の(35)の対象は、幼児から見た父親であり、対称性の動詞において、「と」が、「に」との差異を超越して「に」の領域に進出している例となる。

(35) 「小さいあなたが、一所懸命な顔して、——日高さんのジャケットの裾を、しっかりつかんでた。お父さんと、はぐれちゃいけないと思ったのね」

(2006『ひとがた流し』北村 薫・朝日新聞 2・27夕刊)

4 まとめ

41 事実の確認

1および2で記述したように、現代語では、動詞「別れる」と格助詞「に」との共起は、「死別」の場合を除いては一般的ではない。辞書でも積極的に言及されることのない、いわば「弱小勢力」である。しかし明治以降も、古典語の一定型であったためであろう、相応の使用例が存在する。これにより冒頭の「要旨」に示した5点は確認できた。

また3で見たように、「別れる」と類似の動詞「離れる」「はぐれる」と「に」の共起関係にも変化が生じている可能性もある。「に」の周辺を注視し、「～に別れる」の弱体化は、「に」の問題でもあることを指摘し、本稿の結論としたい。

42 「に」の性格

421 「に」と「と」の差異

「に」との共起が減少する理由は複数存在するであろうが、その一つに、久野(1973)の指摘を挙げたい。すなわち「に」は「と」に比して「固定的／一方的」な性格がある点である。しばしば指摘される「に」と「へ」の対比も、この性格に関連するものであろう。

223で見た、人間関係の変化が生じない、あくまでも空間的な、さらには対等の「別れ」の場合、「に」は「重すぎ・固すぎ」なのではないか。古典語の「～に別る」を受け継いで「～に別れる」もあったが、やがて、対称性の動詞「別れる」については、他の対称性の動詞の場合に準じて、「と」が適切であると認識されるようになったものと考えたい。この「に」の「重さ／固さ」については、次の各例が示唆しているのではないか。

(36) 「名古屋の大須の観音の裏町で、これも浮世に別れたらしい、三味線一挺、古道具屋の店にあったのを工面したのがはじまりで…略… (1912『歌行燈』泉鏡花)

(37) いよいよこの国に別れるというのに、それほどの感慨もわきませんでした。

(1948『ビルマの豎琴』竹山道雄)

(38) いつも姫君が寄りかかっていた東面の柱に別れるのも悲しかった。

(1979『新源氏物語』田辺聖子)

(39) (芥川龍之介について) 母親の発狂という悲劇は、幼くして乳房に別れた胎内体験の欠如とともに、心象の闇にふかく沈んだ原体験として…略…

(三好行雄「芥川龍之介 人と文学」『羅生門・鼻』1984)

人の力を超えた大きな存在である「浮世」、ビルマという国土、家屋の柱、永遠の存在である母の乳房。このような大きなもの、動かないものとの別離には「～に別れる」が、「～と別れる」に比してより適切であるとも考えられる。

422 「に」の負担領域の見直し

また同時に格助詞「に」の負担領域の問題もある。

動詞と格助詞の共起の関係はしばしば変動する。例えば、古典語で一般的であった「～に賞づ」が現代語では「～を賞でる」となっている。また 220で記したが、「俗」との評価がある他動詞用法の「～を分かる」が現時点では排除されなくなり、「(ダレ) に～が分かる」のほか「(ダレ) が～を分かる」も許容されるに至っている。

このように、「に」の周辺には——「に」に限らないが——しばしば変動が生ずる。ここで見た「～に別れる」の弱体化は、あるいは格助詞「に」の負担の見直しとも考えられる。かつて、格助詞「に」の負担領域から「にて」を経て、手段や原因を表す「で」が生じた。現代語でも、従来の「に」の負担領域の「見直し」が行われているのではないか。

すなわち「と」でも分担可能な、あるいは「と」のほうがより適切な状況は多い。「別れる」対象が同等であるとか、当面は人間関係に深刻な変動を生じないとか、また相互に変動があり得る、などの場合である。これに該当するものとしては、毎日会う級友との下車駅での日常的な「別れ」などがある。このような場合には、伝統的な、あるいはもはや時代がかった「に」に依存せず、「と」に分担してもらおう、ということは考えられる。

こうして、古典語の伝統であった「～に別れる」は弱体化し、「～と別れる」が優勢となった。ただし一方では、対象がもはや動くことはない、決定的な重い「別れ」である「死別」の場合は、依然として「に」の性格が尊重され「～別れる」が使用される——辞書に記述されることもになる——ものと考えたい。

「会う」「繋がる」「似る」など、接近していく動作の対称性動詞の場合、「に」と「と」の差異が問題になる。「離れる」「はぐれる」などの離反していく動作の対称性動詞の場合は、

「を」「から」の差異が問題になる。その状況の中で、「別れる」については「と」の優勢を認めざるを得ない。しかし、かつては、「～に別れる」や「～に離れる」も確固たる存在であったことを確認しておきたい。そしてこの「～に別れる」「～に離れる」の弱体化には、格助詞「に」の負担領域の問題が関わっていることは否定できないと考えている。

【参考文献】

- 岩崎摂子（1972）「「きり」・「ぎり」考」 『女子聖学院短期大学紀要』 5
山西正子・駒走昭二（2004）「動詞「わかる」と格助詞」 『目白大学人文学部紀要』 11